

ベルクソンにおける持続の二つの特徴⁽¹⁾

川里 卓

1 はじめに

本論文の目的は、メルロ＝ポンティ(1908-1961)の考察を用いて、ベルクソン(1859-1941)の「持続」(durée)に見られる二つの特徴を明らかにし、特にメルロ＝ポンティが特徴づける「持続」の意義と射程を追求することである。

ベルクソンは『意識に直接与えられているものについての試論』(以下『試論』)において、抽象的に考えられた時間ではなく、実際に生きられた時間を考察するために「持続」という概念を提出する。ベルクソンは持続を次のように定義する。「全く純粋な持続とは、私たちの自我が生きるままとなり、現在の状態と以前の状態の間に区別を設けることをしない時に、私たちの意識の継起がとる形式のことである」(DI, 67)。ベルクソンは、持続の例として音楽を取り上げる。音楽を聴いていてある旋律が乱された場合、私たちはその音楽全体が乱れたように感じるとベルクソンは言う。前の旋律は既に残っていないにもかかわらず、音楽全体が台無しになったと感ずるのである。私たちの意識が、既に流れた旋律を記憶していないならば、このようなことは生じないだろう。というのは、音楽の全体は一つ一つの音符から成り立っており、旋律に間違いが生じた箇所は、そこだけ取り出せば周りの音と区別が可能だからである。しかし、流れている音楽においては、一つのミスが音楽全体を損ねる。これは、私たちが音楽を全体として把握していることを意味する。つまり、既に流れ去ったメロディは、私の精神の時間の中に保存され、今流れているメロディと共に存在している。これが、ベルクソンが言う「意識の継起」つまり「持続」である。ここで言う「記憶」とは、単に昔のことを覚えているという意味での記憶ではない。持続は、時間や記憶の働きと切り離して考えることができないのである。

ベルクソンは『物質と記憶』において、知覚を持続という観点から考察する。すなわち、知覚を時間や記憶の働きの下から捉えるのである。その例として、赤色の知覚を取り上げてみよう。赤の知覚は、無数の振動が凝縮された結果生じる。赤という一瞬の知覚が生じるためには、物質の振動の最初から最後までが「記憶」される必要が

ある。赤色の知覚はこのようなプロセスの最後に成立する。つまり、赤色という認識が私たちの意識に生じるためには、赤という知覚を生み出すために必要な物質の振動が記憶されるといふ動的な運動が必要である。赤色の知覚は、このような記憶の働きと切り離して考えることができない。

本論文では、上記に述べた「持続」に二つの特徴があることに注目する。一つは、赤色の知覚が生じる際の、運動または生成という側面から捉えた持続である。もう一つは、メルロ＝ポンティが特徴づける、持続が維持される側面としての「生きて活動している」(BF, 241)意味における持続である。これは赤色の知覚で言えば、赤の知覚が維持される側面である。本論文では特に、後者の持つ意義と射程について追求したい。

ここで本論の構成を簡単に述べておこう。本論では、第一節で「持続」について、時計の例を用いながら詳しく検討する。第二節では、『物質と記憶』における知覚の問題を取り上げ、持続の運動あるいは生成という側面について『精神のエネルギー』における考察を用いながら検討する。第三節では、メルロ＝ポンティの考察とともに、持続のもう一つの特徴、すなわち持続が維持される側面について検討する。第四節では、第五節の考察への橋渡しとして、他者との非言語的コミュニケーションと対象の認識という観点から議論する。ここで言う非言語的コミュニケーションとは、言葉のやりとりという意味ではない。それは時間や状況を共有することから生じる共感という意味での、感覚的なコミュニケーションのことである。この非言語的コミュニケーションと共通した構造が、私たちが対象を認識する場合に存在することを第四節で明らかにする。第五節では、第四節での考察をもとに、メルロ＝ポンティが考察する持続が持つ議論の射程を検討する。すなわち、メルロ＝ポンティが提出する概念を用いて、ベルクソンの『笑い』における芸術論で扱われる、芸術家の認識の説明を試みる。

2 「持続」について

本節では、「持続」の特徴を、ベルクソンが用いる時計の例を使用して検討する。繰り返しになるが、ベルクソンによる持続の定義をもう一度確認しよう。「全く純粋な持続とは、私たちの自我が生きるままとなり、現在の状態と以前の状態の間に区別

を設けることをしない時に、私たちの意識の継起がとる形式のことである」(DI, 125)。これが持続の定義である。本論文の初めに持続を説明するために音楽の例を用いた。本節では、ベルクソンが『試論』で時計の動きについて考察している部分を取り上げ、持続についてより詳しく検討してみたい。

ベルクソンが生きていた当時の、振り子を持つ時計を想像してみよう。秒針は、振り子の運動とともに動く。そこから一瞬一瞬の秒針の運動を取り出してみると、そこにそれ以前の針と振り子の運動は残っていない。現在の秒針の運動だけが存在する。しかし、私はその秒針が継続して運動してきたと考えている。現在の秒針の運動だけからでは、このことは説明できない。なぜなら、意識の内部で、失われた秒針の運動が現在の秒針の運動に統合されない限り、失われた運動の表象は不可能だからである。つまり、私の意識内部において、前の秒針の運動を現在の瞬間の中へ統合する働きがなければ、そこには現在の秒針の現在の瞬間の運動だけしか存在しなくなる。反対に、秒針の針の運動が存在せず、そこに私だけが存在するとなると、そこには諸々の瞬間を継起させる私の持続だけが残る。すなわち、私の外部には、各々の瞬間が、互いに浸透することなく、それぞれが独立に存在する瞬間があるのに対して、私の内部には、各瞬間を相互に結びつけて、それぞれの瞬間を継起させる能力がある。ベルクソンは言う。

私たちの自我の中には、相互的外在性のない継起がある。自我の外には、継起のない相互外在性がある。相互外在性というのは、現在の[振り子の]揺れは、もはや存在しない以前の[振り子の]揺れと根本的に区別されるからである。しかし、継起の欠如というのは、過去を記憶し、補助空間⁹のうちで二つの揺れやそれらの記号を併置する意識的観察者にとってだけ、存在する(DI, 72-73)

相互外在性のない継起とは、継起していると私たちが考える秒針の運動から、秒針の運動を取り除いたところに現れる、ただ過去が現在に結合しているだけの意識である。これは内容を持たない形式であるが、これが持続のモデルである。この秒針の動きを、現実世界での経験と置き換えれば、私たちが持つ実際の意識になる。つまり、

それぞれの経験は互いに独立したものであるが、私たちの精神はそれらを継起したものと捉え、過去の経験が現在の瞬間の中で生きていることを感じている。既に存在しない過去の経験は、私の精神の時間の中に保存されて、今生きている瞬間と共に存在している。これが、ベルクソンが言う「持続」である。音楽を聴いている時、既に過ぎ去ったメロディ、つまり実際に生きられた時間が現在の旋律のなかに浸透していることと同様、私たちの意識は過去の経験を記憶し、現在の瞬間へと収縮させている。要するに、持続における記憶の働きとは、過去を現在の瞬間に統合する働きのことである。

3 運動あるいは生成としての持続

前節では『試論』の議論を取り上げ、持続の特徴を確認した。本節では、『物質と記憶』の「純粹知覚」において、ベルクソンが知覚を記憶する働きから考察している点について検討する。まず、知覚における記憶の凝縮の働きについて、ベルクソンの定義を見てみよう。ベルクソンは次のように述べている。「知覚するとは、無限に拡散した存在の膨大な諸期間を、より緊張した生のより差異化した諸瞬間へと凝縮し、そして非常に長い歴史を要約することである」(MM, 342)。ベルクソンは知覚することを、多くの瞬間あるいは期間を、一つの瞬間へ凝縮することであると考える。本節ではその中で特に「純粹知覚」に焦点を当て議論を進める。ここで「純粹知覚」を扱うのは、知覚に付随する過去の想起を排除し、純粹に知覚についてだけ論じるためである。例えば、赤という知覚が生じるとき、過去に目にした赤いリンゴや、リンゴに関する想起などが伴う。ここではそのような想起を排除し、単純に知覚が生じたときの側面だけを取り上げる。このことによって、知覚における持続という側面に焦点を当てることが可能になるだろう。

赤色の知覚が無数の振動を一瞬の知覚のうちに凝縮することのうちには、知覚における記憶の働きが存在している。ベルクソンは言う。「知覚はどんなに短いものであっても、ある一定の持続を占めており、その結果として、多くの瞬間を互いに引き延ばす、記憶の努力を必要とする」(MM, 184)。ここで言う「記憶の努力」とは、赤という知覚が生じるために、物質の振動の最初から最後までが保存されるという意味で

ある。これと同じ構造を持つよりわかりやすい例として、ここで『精神のエネルギー』所収の「魂と身体」における議論を取り上げる。これは知覚における記憶の場合と同じ構造を有している。

例えば、「はなし」(causerie)という語を発音する場合を考える。最後の音節である「し」という音節が発音されるまで、この語の間に区切りはない。この言葉は全体を聞き取って初めて意味を成す。従って、言葉を発音している間、既に発音された音節は、どこかに保存されなければならない。ベルクソンはこれが時間の中に保存されると思う。つまり、発話が行われている時に流れている、その時間の中に保存されるのである。これは抽象的に考察される時間ではなく、例えば音楽を聴いている時に流れている、実際に体験される時間である。最後の「し」という発話が終了すると、この言葉の意味は瞬時に理解される。このように、言葉の発話を例にとると、そこに記憶の働きが存在することが理解できる。また、この議論は知覚の場合と同じ構造を有するものである。赤という知覚が成立するまでには、物質の振動が保持されなければならないからである。そしてこの振動の各々は、時間の中に保存されているとすることができる。

この「はなし」という語は、文章全体の中において意味を持つ。その時この文章全体の中に区切りはない。これを過去全体まで広げ、自分の誕生から一つの文章が続いているとする。そうすると、「はなし」という語の場合と同様、過去全体も時間の中に保存されていると考えることができる。すなわち、「私たちの内的生活の全体は、意識の最初の目覚めから始められた一つの文章のような何かである。それは読点で区切られてはいるが、決して句点によって区切られてはいない」(AC, 858)。人生全体も、途中を読点で区切られた一つの発音として捉えるなら、一つ一つ発音が時間の中に保存されるように、過去全体も時間の中に保存されている。このように、記憶する働きという点から捉えると、「はなし」という発話や、知覚の問題、さらに私たちの過去の経験の総体としての人生は、持続の観点から考察することができる。そこでは、過去が時間の中に保存され、また、その過去の全体は最終的に一瞬の認識として把握される。

以上論じたことは、例えば知覚が生じる瞬間に身を置き、持続を運動あるいは生成という観点から捉えたものである。生命の働きには、このように多くの瞬間を一瞬の

認識のうちに凝縮させる機能、つまり過去を現在に引き延ばす働きが存在する。一方、無機物にこのような働きは存在しない。無機物には、過去を現在のうちに陥入させる力がない。存在するのはただ現在の瞬間だけである。これは第一節の例で言えば、現在の秒針の運動だけが存在することである。そこでは、過去の秒針の運動は現在の瞬間に統合されてはいなかった。秒針の運動を継起したものとして把握すること、つまり過去を現在に継起させる働きは、人間の意識を離れて成立することはない。

従って、赤という知覚は、人間の知覚が持つ、無数の物質の振動を収縮させる働きとの関係で考えられなければならない。赤色の知覚が生じるために、物質の振動が記憶されることは、人間の知覚が持つ、内的緊張のリズムと大きく関係している。逆に言えば、物質には物質に固有の振動が存在する。これは人間において赤という知覚が生じるための、その中の無数の振動のうちの一つである。それはどんなに短いものであっても、一定の時間幅を占めている。しかし、物質の振動の各々は、人間の知覚器官で把握できない。今私たちが捉える物質の姿は、物質そのままの姿を捉えたものではなく、私たちが持つ知覚器官に従って構成されたものだからである。要するに、物質の知覚に関して二つの視点が存在する。生物によって知覚される前の物質の姿と、そこから生物の知覚構造に沿って構成された、各々の生物の知覚に現れる物質の姿である。人間の知覚に現れる物質の姿は、必然的に後者の形をとる必要がある。人間は人間の身体が持つ知覚器官を通して、物質を捉えなければならないからである。私たちが捉える世界は、私たちが持つ知覚器官が構成した世界である。それゆえ、そこに主観と客観という区別は存在しない。なぜなら、例えば赤いリンゴを知覚する時、そこで知覚する赤い色は、人間の知覚が構成したものであり、絶対的な客観的な存在を知覚することと異なるからである。言い換えれば、「赤」という色を持つ客観的なリンゴが自分の外部に存在するのではない。外部にあると思われる赤いリンゴも、人間の知覚器官が構成した、主観的なものとして捉えられなければならない。

本節では、知覚における持続を、記憶の働きという観点から、運動あるいは生成という側面に注目した。これに対して、メルロ＝ポンティは「生きて活動している」意味での持続を考察する。これは持続が持続として維持されていく側面である。これについて次節で検討することにしよう。

4 「生きて活動している」意味での持続

メルロ＝ポンティは、無数の瞬間が凝縮した持続に加えて、「生きて活動している」意味での持続について考察している。例えば、物質には物質固有の持続、人間には人間の持続、他の生物にはその生物に特有な持続が存在する。前節では、知覚を無数の瞬間の凝縮という運動の側面から捉えたのであるが、メルロ＝ポンティが注目するのは、凝縮という運動の側面だけでなく、その運動が停止した後、その持続が維持される側面である。これは例えば赤色の知覚で言うと、赤の知覚が維持されることである。本節ではこれを、私が私の持続を把握する内観的側面と、私の存在が維持される側面という二つの観点から考察する。

まず、私が私自身の持続を内的に把握することを検討する。ベルクソン同様、メルロ＝ポンティは、時間を「ピンセットで挟むような」(BF, 240)方法、つまり時間を外から観察する方法ではなく、時間を内部から観察したものとして考察する。内部から捉えた時間とは、私の内部に流れる時間、つまり私自身の持続を把握することである。「時間とは私のことであり、私とは私が捉える持続であり、私のうちにおいて、持続はそれ自身を把握する」(BF, 240)。考察の出発点となるのは私自身の持続である。

この観点から捉えられる私の持続は、他者の持続と異なったものである。私は私に固有の過去の経験があり、私の精神はそれらを継起したものとして捉える。現在流れている音楽の背後に、既に過ぎ去ったメロディの全体が存在しているように、現在の意識は、私の過去の総体を一つの全体として把握する。過去の経験は私の精神の時間の中に保存され、現在の瞬間と共に存在している。私の過去の総体が現在の私を構成している。そして、他者は私と異なる過去の経験を持っており、その過去の全体がその他者の精神を形成している。他者は私と異なる内的緊張を生きている。私が私の持続を持つように、他者はその人に特有の持続がある。これがメルロ＝ポンティにおける持続の第一の特徴である。

次に、私の存在が維持される意味での「持続」について検討する。私は生命として、一つの存在として保たれている。私の心理状態は日々変化し、身体も日々変化する。これらを微細に観察すれば、各々の状態はそれぞれが以前のものとは異なっていること

が理解できる。しかし、大きく見れば私は一つの存在として維持されている。細胞は日々入れ替わり、同じ状態にとどまることがないが、その中で私の存在は保たれている。私の心理状態は、身体の状態に依拠し存続し、絶えず変化しているのであるが、それでも一つのまとまりとして存在している。このような、持続を運動や生成という観点だけではなく、持続が一つの存在として維持される側面をメルロ＝ポンティは考察している。彼は言う。「持続するある仕方に他ならないメロディのような、諸存在、諸構造が存在する」(BF, 241)。「持続とは、単に変化や生成や運動であるだけではなく、生きて活動しているという意味における存在」(BF, 241)である。メルロ＝ポンティの議論は、「持続」についてこの新たな見解を提出するものである。このように、メルロ＝ポンティが考察する「持続」は、私が私の持続を把握するという側面と、存在を維持する意味での持続という二つの視点からの考察が可能である。

さて、私たちは互いにコミュニケーションを行っている。ここで注目するコミュニケーションとは、言葉のやりとりという意味ではなく、時間や状況を共有することから生じる感覚的なコミュニケーションである。これは本節で扱った、一つの存在が維持される持続という側面から見たコミュニケーションである。メルロ＝ポンティの議論は、このような感覚的なコミュニケーションの議論へ敷衍することが可能である。次節では、持続が維持される側面を、感覚的なコミュニケーションという観点から考察するとともに、対象を認識する場合もこれと同じ構造を持つことを検証してみよう。

5 メルロ＝ポンティが特徴づける持続と感覚的コミュニケーション

コミュニケーションという言葉は、国語辞典では「ことばや文字などによる意志の伝達」と定義されている⁹⁾。私たちは「ことばや文字」を介して、他者の思考や意見を理解する。ただ、他者とは私と異なる過去を持ち、私と異なる持続を生きた存在である。言葉を介して表現される他者の考えは、私の考えと異なる。しかし、私たちは自分と異なる他者の考え、つまり自分と異なる持続を持つ他者を理解できる。それゆえ、私たちは他者に対して開かれた存在であると言える。ここでは、私たちが他者に対して開かれた存在であるということを前提とする。その上で、他者とコミュニケーションを行う方法として、「ことばや文字」を介した言語的なコミュニケーションと、

言葉を用いない非言語的なコミュニケーションがあると想定する。本節では、後者の非言語的なコミュニケーションを取り上げ、メルロ＝ポンティが特徴づける持続と関連付けて議論する。ここで言う非言語的なコミュニケーションとは、時間や状況を共有することから生じる、感覚的なコミュニケーションのことである。

悲しさや楽しさという感情は、言葉によってその一般的な意味が伝達できる。一方で、その場を共有しない限り伝わらない悲しみや楽しさが存在する。例えば、私の前に悲しんでいる人がいると、私も同様に悲しくなる。反対に、話す相手が楽しそうに話していると、私も同じように楽しい気持ちになる。このような悲しさや楽しさという感情は、言葉では伝達できないものである。その場にいないとわからない。他者は私と異なる持続を持つ存在である。そのような他者と、ここでは言語を用いずにコミュニケーションを行うことが可能である。知覚器官を介して、私たちは他者の持続を理解することができるのである。私たちはそのような非言語的なコミュニケーションの方法を有している。

私たちは対象を認識する際にも同様の方法を用いている。例えば、空の青色は私たちの心をなだめる効果を持ち、赤い色は私たちに情熱的な感情を喚起する。暗い部屋の中では気分は暗くなり、反対に、美しい森林の中を歩いていると気分は明るくなる。このように、色彩やその場の雰囲気は、私たちの心理にある状態を喚起する働きを持っている。赤という色は、科学が定義する客観的な側面を持つだけでなく、心理的な質感をもたらすのである。他者との非言語的なコミュニケーションの場面では、その場を共有することで共通の感覚が引き起こされる。これは対象を認識する場合も同様であり、赤という色が私たちの目の前に存在する時、私たちはその赤色が喚起する心理的な影響と無関係ではいられない。ある色彩を持つ対象が私の知覚に現れると、私は何らかの心理的影響を受けとる。これは言語を介したコミュニケーションではない。相手は人間ではなく、ある色彩であり、何らかの事物であるが、そこでは私たちが他者と関わる場合に類似した認識、感覚的なコミュニケーションが行われている。

次節では、この観点から、私と事物との関係についてより詳しく考察してみたい。その中で、メルロ＝ポンティが特徴づける持続が、『笑い』においてベルクソンが取り上げる芸術家の認識と、どのような関係にあるのかを明らかにする。

6 「生きて活動している」意味における持続の『笑い』における展開

以上の議論の射程を追求するために、本節では『笑い』の第三章においてベルクソンが考察する、芸術家の認識を取り上げる。画家がリンゴを描く場合、画家はリンゴと言語を介したコミュニケーションを行うのではない。画家はリンゴを視覚で捉え、それをキャンバス上に描く。これは頭の中で抽象的に行われる作業ではない。視覚という身体の知覚器官を介した、感覚的な理解の仕方である。従って、画家がリンゴを認識する方法は、感覚的コミュニケーションに類似した認識の下で考察されなければならない。その方法の中で、芸術家はリンゴが持つ豊かな持続を把握する。

『笑い』においては、『物質と記憶』で提出された「生活への注意」(attention à la vie)の概念が、芸術家の認識との関係で考察される。『物質と記憶』において、「生活への注意」とは、現実生活へ適応するための注意のことを指す言葉である。『物質と記憶』においてこの概念は、現実生活に適応するための、精神の緊張をもたらす積極的な意味で捉えられる。一方、『笑い』における芸術家の認識では、この概念は、行動の役に立つ側面だけを照らし出す篩の役割として、消極的な意味で用いられている。ベルクソンはこれを「ヴェール」(voile)と名付ける。この「ヴェール」は、生活に有用な印象だけを認識させ、事物の直接的な認識を妨げる働きをするものである。ベルクソンは言う。

人は生活していく必要があり、生命は、事物が私たちの要求との関係で把握されることを要求している。生活することは行動することである。生活するとは、適切な反応によって対象に応じるために、有用な印象だけを諸対象から受け入れることである。他の印象は曖昧なものになり、漠然としか私たちに至らざるを得ない(Rire, 459)

例えば、リンゴは人々にとって食べるものであるため、リンゴを知覚するときは色や形など、リンゴと判断できる有用な情報を認識する。しかし、リンゴをよく観察すると、表面には様々なニュアンスが存在している。食べるという注意は、このようなニュアンスに対して、私たちを無関心にさせる。一方、芸術家はこのような認識に捕らわれず、リンゴそのものを認識する観点を持する。私たちがリンゴを注意深く認識

すると、そこには単に赤い色だけが存在しているのではないことに気が付く。赤の中にも無数のニュアンスが存在するとともに、リンゴにはそのほかにも黄色や黄緑など様々な色が含まれていることがわかる。ベルクソンは次のように述べている。「知覚するとは、無限に拡散した存在の膨大な諸期間を、より緊張した生のより差異化した諸瞬間へと凝縮し、そうして非常に長い歴史を要約することである」(MM, 342)。赤色の知覚は、無数の物質の振動を、一瞬の認識のうちに凝縮することから生じる。同様に、赤色の様々なニュアンスのそれぞれは、様々な凝縮の程度の違いから生じる。また、その他の色彩は、赤色と異なる程度における物質の振動の収縮の結果である。リンゴには様々な色彩があり、これはリンゴが非常に豊かな持続を持つということを意味している。

第二節では、私たちが捉える世界は、人間の知覚器官が構成した世界であり、そこには主観と客観という区別は存在しないと述べた。赤いリンゴを知覚する時、そこで知覚する赤い色は、人間の知覚器官が構成したものである。様々な色彩を持つリンゴは、私の知覚器官が構成した豊かな色彩を持つリンゴである。もし私の目の前にリンゴが存在しなければ、私の視覚がそのリンゴの豊かな持続を捉えることもない。しかし、人間が知覚していない時でもリンゴは存在する。そのリンゴの姿は、私たちが思い浮かべるリンゴの姿とは異なったものである。人間の知覚に現れるリンゴの姿は、人間にとってのリンゴの姿だからである。他の生物は人間と異なる知覚器官を持つため、リンゴを人間と異なった姿で把握する。また、リンゴがどの生物からも知覚されない時、リンゴはその実在としての姿で存在している。そのような実在としてのリンゴが、人間の知覚器官に現れるとき、人間の知覚器官は、それを豊かな色彩を持つリンゴとして構成する。

芸術家が捉えるのは、このようなリンゴの姿である。豊かな色彩を持つものとして私たちの視覚が構成したリンゴを、画家は認識する。それは人間にとってのリンゴの美しさであるかもしれない。しかし、このリンゴは、様々な色彩を持った、豊かな持続を備えたものである。従って、そのリンゴは、非常に豊かな認識を私たちにもたらす。画家は有用性という観点を超えて、リンゴの色彩の豊かさを捉える。画家はリンゴが持つ持続の豊かさに至ることが可能である。それは言語的なコミュニケーションによるのではない。豊かな持続を持つリンゴを、画家は知覚器官を介して認識する。言語以前の感覚的なコミュニケーションによって、リンゴの豊かな色彩を認識するの

である。メルロ＝ポンティが「持続するある仕方に他ならないメロディのような、諸存在、諸構造が存在する」(BF, 241)と述べたことは、画家における「生きて活動している」意味におけるリンゴの持続の認識に結びつく。画家はリンゴの豊かな持続を、感覚的コミュニケーションによって把握する。メルロ＝ポンティが特徴づける持続は、『笑い』における芸術家の認識の場合において、このように展開されている。

註

- (1) 本論文は、2017年4月8日に名古屋大学にて開催された、名古屋大学哲学会第三十二回研究大会若手研究発表における「ベルクソンの持続における二つの特徴」の内容を大幅に修正したものである。
- (2) 竹内はこの「補助空間」について、『意識に直接与えられたものについての試論』の訳注で、「空間の第四次元として想定される『等質時間』のこと。あるいは、その第四次元を加えた数理的四次元空間のことである(『意識に直接与えられているものについての試論』注記12頁)」と述べている。
- (3) 『日本国語大辞典 第二版』小学館、2000-2002年。

参考文献

- [AC] = Bergson, H, *L'âme et le corps*, in *Œuvre*, Paris, Presses Universitaires de France, pp.836-860. (『精神のエネルギー』原章二訳、平凡社、2012年。)
- [DI] = Bergson, H, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, in *Œuvre*, pp.1-157. (『意識に直接与えられているものについての試論』竹内信夫訳、白水社、2010年。)
- [MM] = Bergson, H, *Matière et Mémoire*, in *Œuvre*, pp.159-379. (『物質と記憶』竹内信夫訳、白水社、2011年。)
- [Rire] = *Le Rire*, in *Œuvre*, pp.381-485. (『笑い』林達夫訳、岩波書店、2012年。)
- [BF] = M.Merleau-Ponty, *Bergson se faisant in Eloge de la philosophie*, Gallimard, 2005. (『生成するベルクソン像』『哲学者とその影』所収、木田元・滝浦静雄訳、みすず書房、2001年。)
- 『日本国語大辞典 第二版』小学館、2001-2002年。